

北里柴三郎

1

shibasaburo
kitazato
1853.1.29~1931.6.13

今回は「細菌学の父」「日本近代医学の父」として知られている北里柴三郎についてご紹介したいと思います。

北里柴三郎は1853年1月29日(嘉永5年12月20日)、北里惟信・貞の長男(兄二人が病気で早世)として阿蘇郡小国郷北里村(現小国町北里)に生まれました。

柴三郎は生まれつき頑健で腕力もあり、軍人か政治家を志望していたようですが、母親の勧めもあり8歳で伯母の嫁ぎ先、小国郷の橋本龍雲の元で四書五経を学び始めます。10歳になると、母方の祖父豊後国森・久留島藩士加藤海助に預けられ、園田保(儒学者)の私塾で学びました。

その後、藩校「時習館」に学び、明治4(1871)年、18歳で熊本古城医学所(後の熊本医学校)に入学。オランダ人教師マンズフェルトに師事し、本格的に医学の道を志すようになります。

明治7(1874)年、東京医学校(現在の東京大学医学部)に進学。この頃、「医学を国民の幸福のために用いるべき」という信念を持ち、「予防医学」を生涯の仕事とすることを決意。卒業後、後の日銀総裁松尾臣善の次女席と結婚し、内務省衛生局に入ります。ここでは、緒方正規(熊本医学校の同輩・後の東京帝国大学医科大学学長)の紹介もあり、明

治19(1886)年から6年間、ベルリン大学のロベルト・コッホの研究室にて細菌学研究に没頭します。

明治22(1889)年、破傷風菌の純粋培養に成功。さらに翌年には破傷風の免疫体とその治療法(血清療法)を発見。世界の医学界から注目されます。しかし、緒方正規の学説(「脚気菌説」・脚気の原因を細菌とする)を否定したところから東大医学部が反発。イギリスやアメリカの破格の条件を断り、明治25(1892)年5月に帰国しますが、11月まで内務省への復帰が認められませんでした。

その後、柴三郎の業績を認める福沢諭吉の援助により、わが国初の伝染病研究所が設立され、所長として迎えられました。柴三郎の目覚ましい業績はこの後も続き、明治26(1893)年、伝染病撲滅を目指したわが国初の結核専門病院「土筆ヶ岡養生園」を開設。翌年には香港に派遣され、ペスト菌を発見します。

明治32(1889)年、先の伝染病研究所は内務省管轄となりますが、伝染病研究と衛生行政は表裏一体であるべきという信念を持つ柴三郎は引き続き所長を務め、細菌学の研究と指導にあたりました。明治34(1901)年には第一回ノーベル賞医学生理部門の最終候補となり、明治

39(1906)年には日本連合医学会会頭を務めています。

大正3(1914)年、伝染病研究所が東京大学の傘下に入れるべく、文部省に移管されることになりました。信念に反する柴三郎は所長を辞任し、私財を投じて北里研究所を設立。研究や指導を行いながらも大正8(1917)年には福沢諭吉の恩に報いるため、慶應大学医学部創設、初代医学部長も務めています。

東大医学部との関係はその後微妙な影を落としたままでしたが、緒方正規との友情は変わることなく続き、彼の葬儀(1919・7没)では柴三郎が弔事を述べています。情に篤く物事に筋を通す熊本人らしさ(モッコス)は、まさに柴三郎そのものであると言えます。

66歳になった柴三郎は、北里研究所の財産を一切寄付して社団法人北里研究所を設立。その後71歳のとき日本医師会を創設、初代会長になりました。

明治維新、西南戦争、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、関東大震災と激動期の日本にあって、その人生を国民

(人類)の幸福の向上にささげ78歳の人生を終えます。昭和6(1931)年6月13日脳溢血により死亡。東京・青山墓地に葬られています。

北里柴三郎のゆかりの地

北里柴三郎記念館
(阿蘇郡小国町)

北里柴三郎記念室
(東京都港区白金・学校法人北里研究所内)

◀北里柴三郎記念室にある銅像



北里柴三郎

2



▶ 記念室入口近くにある胸像(ペスト菌発見の功績により送られた)

今回は北里柴三郎ゆかりの地を訪ねます。まず生誕の地である小国町に向かいます。阿蘇郡小国町は熊本県の最北端にあり、大阿蘇山が陥没する前の太古の姿を想像していただきますと、その北側の裾野の2合目から3合目付近に位置しています。

阿蘇谷からカルデラの急坂を登って北外輪山に出ると、そこからはなだらかな下り坂が続きます。小国町の周囲は南(南小国町)を除けば東西北を大分県に囲まれており、町の面積の74%は山林で、小国杉の美林、清らかな川、澄んだ空気、そしてあちこちに湧き出る温泉、このような自然に恵まれたところで北里柴三郎は生を受けました。

今も明治のころと同じように自然に包まれた何かほっとするようなたたずまいのところですか。ぜひ一度足を運んで見られてはいかがでしょうか。



1 北里柴三郎記念館

(阿蘇郡小国町北里3199)

記念館は、北里文庫(図書館)、貴賓館、生家の3つの建物からなります。

北里文庫は、大正5(1916)年、郷里の子ども達のために私財を投じ、建設した図書館で、県立図書館に次いで2番目という蔵書を誇りました。貴賓館は、帰省した際の邸宅として、あるいは郷里を訪れたお客様をもてなす場として、図書館と同時期に建設されたものです。生家は河川改修の関係で昭和40(1965)年、この地に移築されたものです。もとはこの地のすぐ北側を流れている北里川右岸にありました。

これらの施設や生家は時代とともに荒れていきました。建設から70年余り経った昭和62(1987)年、当時の宮崎暢俊小国町長によって、柴三郎の理念に則った地域振興策(学びやの里構想)が提唱されました。この構想に柴三郎の学問を受け継ぐ北里研究所と北里学園が学園創立25周年事業として全面的に支援・協力し、世界に誇る郷土の名士を称える施設、北里柴三郎記念館として立派に再生しました。

現在、北里文庫には柴三郎に関する遺品や貴重な品々を収蔵陳列してあります。

また、記念館に隣接する場所には研修宿泊施設「木魂館」や、レストランや温泉センターが整備された交流促進センター「北里パラソ」が作られ、人々の学びや交流の場として親しまれています。



▲ 生家の一部(上)
貴賓館(下)
北里柴三郎像(右)

2 北里柴三郎記念室

(東京都港区白金5-9-1(北里研究所・北里大学構内))

昭和39(1964)年、北里研究所の創立50周年記念事業の一環として、柴三郎の業績を顕彰するために記念館の設立を計画。北里研究所内に「遺品室」を開設し、収集した資料を展示したのがはじまりです。

その後、徐々に資料整備が進み、平成

9(1997)年、現在の北里本館1階に移転され、一般公開されるようになりました。

記念室内には柴三郎の生い立ちからその研究業績等が資料と写真パネルによって詳しく紹介されており、勲章などの貴重な品も展示されています。また、本館前には恩師のコッホを祀った神社(コッホ・北里神社)や、コッホお手植えの木などがあります。上京の際にぜひ見ていただきたいところです。

記念室のすぐ近くには、5月4日5日の清正公祭りでも知られた「覚林寺」(港区白金台1-1-47)があります。覚



▲ コッホ・北里神社

林寺は清正が文禄・慶長の役から連れ帰った李氏王朝の王子が清正の恩に報いるため建立したものです。ついでに足を伸ばされたらいかがでしょうか。